

一月二〇日、安倍晋三首相は、通算在職日数が二八七日を記録し、戦前の桂太郎元首相を抜いて憲政史上最長となった。七年前、民主党政権を破って誕生した安倍政権がこれほど長く続くとは多くの人が予想していなかっただろう。

安本法制の制定や、「モリカケ問題」などで支持率が急落した場面もあったが、そのたびに切り抜けてきた。今夏の参院選後に発足した第四次安倍第二次改造内閣も、閣僚の辞任や失言が相次ぎ、苦境に陥っているが、政権そのものを揺るがすまでには至っていない。

長期安定政権を実現しているのは、選挙での無類の強さだ。政権奪還後、計五回の国政選挙を、野党を圧倒して勝った。それを下支えているのが「低投票率」だろう。衆院選二回と参院選二回はいずれも投票率が五〇%前半。七月の参院選は二四年ぶりに五〇%を割り込んだ。

一〇年前、民主党政権が誕生した衆院選は投票率が七〇%近くにまで達していた。自民政権からの変化を託し、多くの有権者が民主党に期待した一票だった。「政治が変わるかもしれない」。こんな一票が持つリアリティーが、あの衆院選には確かにあった。だが、その後の民主党政権の右往左往ぶりに、有権者は離反し、自民党への

「一票」のリアリティー

回歸につながった。「投票したい政党がない」という選挙での棄権行動が結果的に自民党を利してきた。

◇ ◇

だが、有権者に変化の兆しを感じる。低投票率に終わり、自民党が大勝した七月の参院選だったが、「れいわ新選組」と「NHKから国民を守る党」はそのわずかな変化の象徴だろう。れいわ新選組は比例代表で約二二八万票を集め、二議席を獲得した。N国党は約九八万票で、比例代表最後の議席を得た。選挙後、両党は、テレビのワイドショーへの露出度が一気に高まり、お茶の間の話題に躍り出た。

「自分の入れた票が当選につながったと感じることが初めてできた」。札幌市内の二〇代の男性はこう漏らした。直前まで投票に行くかどうか迷っていたが、NHKの受信料制度に疑問を持ち、とりあえず、N国党に投票した。結果は「本当にまさかの当選。その後の（N国党の）行動には賛成できないが、自分の一票が生きたと話す。れいわ新選組は障害者二人が議席を得て、早くもその効果が現れている。参院では急選、本会議場に車椅子用の議員席を設置したり、介助者を認めたりするなど、国会のバリアフリー化が進んでいる。

同党の山本太郎代表は九月一八〜二八日、

北海道の利尻島から遊説をスタートし、札幌や釧路、旭川など道内八市町を回った。二四日夜、JR札幌駅南口広場であった街頭演説を見た。開始前から一〇〇人を超える聴衆が集まり、山本代表の演説が始まると、駅周辺の椅子に腰掛けて待っていた人々が一斉に遊説場所へと向かう。平日の夜だというのに、聴衆は数百人に上った。街頭演説は、山本代表が参加者の質問に答える形で進み、同党が野党共闘のスロガンとして掲げる「消費税五%減税」や最低賃金、地球温暖化、原発再稼働などについて意見を交わした。従来の政党に見られる動員式の街頭演説ではなく、政治を変えたいという市民の思いを感じた。

◇ ◇

参院選での有権者の変化は、民主党政権誕生の時と比べれば、わずかだ。だが、一票で政治を変えられることを知った有権者がいる。参院選の比例代表で得票が伸びなかった立憲民主党や国民民主党などの野党が、有権者の「声なき声」をくみ取ることができると。れいわ新選組が投げかける「消費税五%減税」に、どう対応していくのか。一票のリアリティーが復活すれば、政治に大きな変革が訪れる可能性が出てくる。野党は正念場を迎えている。

△洋▽